

目録システム地域講習会（図書コース）受講報告

徳岡久実

1 はじめに

国立情報学研究所（NII：National Institute of Informatics）は、情報学に関する総合研究並びに学術情報流通のための先端的な基盤の開発及び整備を行うことを目的とした大学共同利用機関として、平成12年4月に学術情報センターより改組された機関である。その特色をNIIのホームページ^{（注1）}では以下のようにまとめている。

- ・情報分野における総合的研究
- ・学際性の追求
- ・産官学の連携
- ・国際的な研究活動
- ・学術情報基盤整備の推進

なお、旧学術情報センターの各サービスは「NACSIS」の名称を残したまま継続している。

標記講習会はNIIが主催している研修事業のひとつであり、受講機会の拡大を図るため、NIIで実施しているものと同様の講習会を図書コースと雑誌コースに分けて、全国各大学図書館等との共催で各地域ごとに開催している。ちなみに平成12年度の地域講習会（図書コース）は15会場で16回開催された。私自身数年前から申し込みをしていたが、応募者多数とのことでなかなか受講することができず、今回やっとその機会を得たので、その概略を報告する。

2 講習会内容

標記講習会は総合目録データベースの構成、内容、データ登録の考え方（入力基準）などを理解することを目的としている。今回私が受講したのは平成12年10月16日から18日までの3日間、大阪大学附属図書館本館にて開催されたものである。講習会の形式は目録システムの概要を知るために「目録システムの概論・基準」などビデオ上映とその補足説明の講義形式が部分的にあったが、「目録検索」や「図書登録実習」についてのほとんどは各自端末に向かった実習形式が中心である。様々なパターンの課題に沿って実際の操作を各人が端末の前に座って行うため、受講生も10名と少人数制であった。また、講

師及び指導はNII研究職員、共催機関及び近隣の機関等の総合目録データベース実務研修修了者、または同等の要件を備える実務担当者が行うことになっており、今回の講習会は大阪大学附属図書館の実務担当者の方々が交替で担当されていた。

3 目録システムとは

目録システムとは、研究者の研究活動を支援するため、全国の大学図書館等にどのような学術文献（図書・雑誌）が所蔵されているかという目録所在情報が分かる総合目録データベース（NC）を構築するためのシステムである。この目録システムでは参加図書館によるオンライン共同分担入力方式を採用しているため、検索して該当する書誌がNCに登録されていれば、その書誌を利用することができるが、検索しても該当の書誌が見つからなければ、現物に基づいて新規書誌を作成しなくてはならない。しかし、従来のような各図書館毎の目録作成の重複を防ぎ、目録業務の負担を軽減している。また、データベースを効率的に形成するために、JAPAN/MARCなどの標準的な目録データである外部MARC（MACHINE READABLE CATALOGING）を参照ファイルとして利用することができる。

平成12年10月7日現在でNCには約547万件もの図書の書誌が登録され、1週間に約1万件の割合で増加しているとのことである。また、NCはILLシステム（NACSIS-ILL：図書館間相互貸借システム）のほか、情報検索サービス（NACSIS-IR）やWWW総合目録データベース検索サービス（Webcat）でも活用され、一般利用者への目録所在情報の提供にも大きな役割を果たしている。

さらに、参加図書館では、データをダウンロードすることで個々の図書館ごとの蔵書目録データベースを構築することができる。その目録データベースを利用することにより、OPAC（利用者用オンライン目録）をサービスすることも可能となり、選書や発注・受入業務、閲覧・貸出等の図書館の各種業務システムでも有効活用することができるのである。

また、NIIでは、従来の目録システムNACSIS-CATと平成9年度より運用開始した新目録システムNACSIS-CAT2が稼働されている。移行期を経て、平成17年1月には全面的に新目録システムに移行する予定である。（今回の講習会では開催場所の大阪大学の環境により従来のNACSIS-CATでの講習が行われた。）

NACSIS-CAT2は、最近のネットワーク環境や計算機のオープン化に対応したシステムである。基本的な考え方は従来の目録システムと同じで扱うデータベースも同一のものである。だから、データベースの構造とその取扱い方法や目録データの記述などは共通しているが、一番の違いは通信単位が仮想画面と呼ばれる画面単位から実データの部分だけを転送するレコード単位への変更であり、これにより従来では画面構成・操作方法が固定・共通していたものが、クライアントごとに画面構成や操作方法が異なることも可能となる。

NCの書誌ファイルの構成はまず「図書」と「雑誌」とに分かれている。原則として、終期を予定せず逐次的に刊行され、個々の出版物理単位を識別・順序付けする番号があるものを雑誌扱いとし、それ以外のものを図書扱いとしているが、図書・雑誌の境界領域にある資料は双方のファイルへ登録することができる。NC内では和資料と洋資料の区別はないが、参照ファイルでは和資料と洋資料を収録するファイルが異なっている。

また、目録規則については、タイトルが日本語・中国語の資料は日本目録規則1987年改訂版(NCR87R)に準拠しており、タイトルが日本語・中国語以外の資料は英米目録規則第2版1988年改訂版(AACR2R)に準拠している。

本学図書館もNCの書誌形式へ切り替えも兼ねた新システムへ向けて現在検討中であるが、NCの書誌ファイルの構成と現在稼働している本学図書館システムにおける書誌の取り方の違いについて私なりに気づいたことを述べておく。大きく違う点は「シリーズもの」の書誌の取り方である。例えば、本学現行システムでは上下巻ものについてもそれぞれ物理単位で書誌を持ち、形態に関する事項についても上下巻とも個々のページ数のデータが入力されているが、NCでは一つの同一書誌に巻冊次等のデータとして「上巻」「下巻」とくくられ、形態に関する事項については個々のページ数のデータではなく、単に「2冊」となる。また、3階層のシリーズもの

については、本学現行システムは「上位の階層があります」「下位の階層があります」など3階層の親子関係を階層ごとに見えるよう実現しているが、NCでは最上位の集合書誌と最下位の単行書誌単位の書誌を作成し、中間書誌については作成単位とならないので、検索時に充分注意する必要があり、本学現行システムとの違いを充分認識しておくべきではない。

4 所感

今回の受講者10名のうち6名が私立大学で4名は国公立大学勤務の方であった。少人数制の講習会なので、希望者が多い割になかなか受講できないという現状があるようである。他大学の受講生と情報交換をしたなかで、私立大学の傾向としては積極的に新規の書誌データをNCに作成するのではなく、検索してヒットしたものに所蔵をつけていくことを優先している大学が多いように感じられた。

一人一台の端末を利用して実際の作業を体験できたので、NCのデータ構造などがよく分かったのだが、NCは共同分担入力方式のデータであるので、書誌データの微妙な個人差をも感じた。例えばそれは、講習会場で受講生10人が全く同じ情報量のテキストから同時にその書誌データを作成しても、全く同じ書誌が出来たわけではなく、それぞれ微妙な違いが生じていたことでも証明できるのだが、書誌作成するためにはかなりの訓練と検索の徹底性が必要だと思われる。もちろん「目録システム利用マニュアル」や「目録システム・コーディングマニュアル」などマニュアル類も充実しているので、きちんと確認しながら作業を進めることや共通の認識を持つことが大切である。

新システムへの転換期にこの講習会へ参加し、NCのデータ構造を理解することが出来たことは大きな成果であった。今後には生かすべく、更なる努力を重ねたい。また、最後になったが、きめ細かい指導をしてくださった大阪大学附属図書館の皆様と、講習会に参加するにあたりご協力くださった課員の皆様にお礼を申しあげたい。

(注1) <http://www.nii.ac.jp/brief/tokusyoku-j.html>

参考文献

目録システム講習会『テキスト図書編』

(当日の配布資料、A4版、151頁)

(学術資料課 とくおか くみ)